

『阿弥陀経』における「微妙香潔」について

畝 部 俊 英

はじめに

極楽世界にある池の中の蓮華について、『阿弥陀経』は次のように述べている。この文を「蓮池の文」と呼ぶことにして、そこに見出されるいくさかの問題を取り上げ、検討してみたい。

(1) 鳩摩羅什訳『阿弥陀経』(402年訳出⁽¹⁾)

池中蓮華*、大如車輪。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔。⁽²⁾

* 大正蔵には蓮花とあるが、麗本による。

(池の中の蓮華、大きさ車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり、微妙香潔なり。)

極楽国土にある池の蓮華は、大きさが車輪ほどもあり、青色には青い光があり、黄色には黄の光があり、赤色には赤い光があり、白色には白い光がある。そして、それらの蓮華は「微妙香潔」であると讃えられている。しかし、この箇所に対応する梵文は、

(2) 梵文『阿弥陀経』(*The Smaller Sukhāvativyūha*)

tāsu ca puṣkarīṇiṣu santi padmāni jātāni nīlāni nīlavarṇāni nīlanirbhāsāni nīlanidarśanāni | pītāni pītavarṇāni pītanirbhāsāni pītanidarśanāni | lohītāni lohītarṇāni lohītanirbhāsāni

lohitanidarśanāni | avadātāny avadātavarṇāny avadātanirbhā-
sāny avadātanidarśanāni | citrāṇi citravarṇāni citranirbhāsāni
citrانidarśanāni śakaṭacakraṇapramāṇapariṇāhāni |⁽³⁾

（また、これらの蓮池の中には、もろもろの蓮華（padma）が生じていて、青のものは青の色、青の光、青の外観をもっており、黄のものは黄の色、黄の光、黄の外観をもっており、赤のものは赤の色、赤の光、赤の外観をもっており、白のものは白の色、白の光、白の外観をもっており、雑色の（citra）ものは雑色の色、雑色の光、雑色の外観をもっており、〔蓮華の〕まわりは車輪ほどの大きさがある。）

とあって、『阿弥陀経』にはない「雑色のものは雑色の色、雑色の光、雑色の外観をもっており」という部分があるが、「微妙香潔」にあたる箇所がない。従って、この箇所は訳出者・鳩摩羅什によって創られ、加えられたものとも見られるが、果たしてそうであろうか。

実は、この「蓮池の文」は「極楽の光景に類似する描写」⁽⁴⁾の一部分として諸経典に出てくる定型表現の一つである。それらの諸経典にあたってみれば「微妙香潔」の箇所が鳩摩羅什によって創られ、加えられたものかどうか、自ずと分かってくるであろう。そこで、「極楽の光景に類似する描写」のある諸経典を取り上げ、「蓮池の文」を検討してみることにする。

1

最初に、チベット語訳『阿弥陀経』における「蓮池の文」を見ておく。

(3) チベット語訳『阿弥陀経』

rdzing de dag kun nas padma skyes pa 'di lta ste | gser gyi kha dog |
gser gi 'od 'byung ba | gser lta bur ston pa | sngon po kha dog
sngon po | 'od sngon po 'byung ba | sngon po lta bur ston pa | ser
po kha dog ser po | 'od ser po 'byung ba | ser po lta bur ston pa |
dmar po kha dog dmar po | 'od dmar po 'byung ba | dmar po lta bur

ston pa | dkar po kha dog dkar po | 'od dkar po 'byung ba | dkar po
lta bur ston pa | bkra ba | kha dog bkra ba 'od bkra ba | 'byung ba |
bkra ba lta bur ston pa | shing ta'i 'phang lo tsam dag skyes so ॥⁽⁵⁾

(これらの池には、まわりに蓮華 (padma) が生じていて、すなわち [金のものは] 金の色で、金の光を生じ、金のように見え、青のものは青の色で、青の光を生じ、青のように見え、黄のものは黄の色で、黄の光を生じ、黄のように見え、赤のものは赤の色で、赤の光を生じ、赤のように見え、白のものは白の色で、白の光を生じ、白のように見え、雑色のものは雑色の色で、雑色の光を生じ、雑色のように見え、車の輪の [大きさ] ほど [のもの] などが生じている。)

チベット語訳には、梵文『阿弥陀経』と同じく「雑色のものは雑色の色で、雑色の光を生じ、雑色のように見え」という部分に加えて更に「金の色で、金の光を生じ、金のように見え」という箇所があるが、「微妙香潔」にあたる箇所はない。そこで、次に『阿弥陀経』の異訳ではどうなっているかを見ておく。

(4) 玄奘訳『称讚浄土仏摂受経』(以下『称讚浄土経』)という。650年訳出⁽⁶⁾

是諸池中、常有種種雑色蓮華、量如車輪。青形青顛、青光青影、黄形黄顛、黄光黄影、赤形赤顛、赤光赤影、白形白顛、白光白影、四形四顛、四光四影。⁽⁷⁾

(このもろもろの池の中には、常に種種雑色の蓮華あり、量は車輪のごとし。青き形には青き顛 [色]、青き光、青き影あり、黄なる形には黄なる顛 [色]、黄なる光、黄なる影あり、赤き形には赤き顛 [色]、赤き光、赤き影あり、白き形には白き顛 [色]、白き光、白き影あり、四なる形には四なる顛 [色]、四なる光、四なる影あり。)

『阿弥陀経』には、青、黄、赤、白が挙げられているが、この『称讚浄土経』には青・黄・赤・白の次に「四形四顛、四光四影」が加わっている。これは梵文では、“citrāṇi citravarṇāni citranirbhāsāni citranidarśanā-

ni”（「雑色のものは雑色の色、雑色の光、雑色の外観をもっており」）に相当する箇所であろうと思われるが、藤田宏達博士はこの点について「しからば、これは citrāṇi を catāri、citra-を catur-と誤伝もしくは誤読したか、あるいは青・黄・赤・白の四つの色がまじっている意味で取意識したものであろう」と註記し⁽⁸⁾、その後、更に一步進めて、「これは筆受者の力量不足によってもたらされた誤訳ではないかという疑念が生ずるのである」と述べている⁽⁹⁾。藤田博士が「誤伝」と言っているように、用いられた原本そのものが既に杜撰なものであったのではないのか、訳場の組織から見て、果たして筆受者のみにその原因を求めてよいのかなど、この問題についてはなお検討の余地があるようにも思う。しかし、この箇所はいずれにしても梵文やチベット語訳と同じく「雑色のもの」が加わっていると見做しておく。したがって、文中の「常有種種雑色蓮華」の「雑色」は「色の雑った」という意味ではなく、青いもの、黄いろいものなどの、「いろいろの色」という意味であろう。そして、この『称讃浄土経』にも「微妙香潔」にあたる箇所はないのである。

2

以上のように、『阿弥陀経』における「微妙香潔」の箇所は、梵文およびチベット語訳の『阿弥陀経』、そして『称讃浄土経』にはない。そこで、その他の、パーリ、阿含（梵文を含む）、ならびに大乘の諸経典における「極楽の光景に類似する描写」の一部分である「蓮池の文」を取り出してみることによって、「微妙香潔」の箇所が鳩摩羅什によって創られ、加えられたものかどうか分かるであろうから、次にそれらの文を見ていくことにする。そこで、まず〈世記経〉類の文を見てみよう。

〈世記経〉類

(5) 法炬訳『大楼炭経』（291—312年訳出⁽¹⁰⁾）

a) 上有水、名阿那*達。…其水中有青蓮華・紅蓮華・白蓮華・黄

蓮華。華亦有火色者、金色者、青色者、紅色者、赤色者、白色者。周匝大如車輪。⁽¹¹⁾

* 那は明本では耨。

(上に水あり、阿那達と名づく。…。その水の中に青蓮華・紅蓮華・白蓮華・黄蓮華あり。華また火色のもの、金色のもの、青色のもの、紅色のもの、赤色のもの、白色のものあり。周匝の大きさ車輪のごとし。)

b) 阿須倫水中亦有青・紅・黄・白蓮華、柔軟甚香好。⁽¹²⁾

(阿須倫の水の中にまた青・紅・黄・白の蓮華あり、柔軟にしてはなはだ香りよし。)

〈世記経〉類には、さまざまな世界が説かれているので、「極楽の光景に類似する描写」もいくつかある。内容はほとんど同じであるので、その中でも特に『阿弥陀経』と類似する二箇所を取り出し、a) と b) とした。なお、それぞれの経典より取り出した箇所は、必ずしも同一箇所とは限っていない。

『大樓炭経』は〈世記経〉類では最古訳の経典であるが、a) と b) の二箇所を合わすと『阿弥陀経』の「蓮池の文」によく似た内容となり、b) では「甚香好」と香について言及している。また、チベット語訳『阿弥陀経』には「金の色で、金の光を生じ、金のように見え」という箇所があるが、a) の文にも「金色者」という箇所がある。そして、蓮華は四種であるが、色については六色が挙げられている。

(6) 竺仏念訳『長阿含経』・『世記経』(413年訳出⁽¹³⁾)

a) 善住樹王北有大浴池、名摩陀延。…。又其池中生四種華。青・黄・赤・白、衆色參間。華如車輪、…。⁽¹⁴⁾

(善住樹王の北に大浴池あり、摩陀延と名づく。…。また、その池の中に四種の華を生ず。青・黄・赤・白、もろもろの色参間す。華は車輪のごとく、…。)

b) 阿須倫宮水中生花優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花、柔

軟香潔。⁽¹⁵⁾

(阿須倫宮の水の中に生ずる花は優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花にして、柔軟香潔なり。)

『大樓炭經』と見比べてみると、この『世記經』の a) の箇所はやや簡潔に訳されているように見えるが、内容はほとんど変わらない。なお、b) の箇所の直前に次のような記述がある。

閻浮提人所貴水花優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花・須*乾頭花、柔軟香潔⁽¹⁶⁾。

* 須は宋・元・明の三本では頭。

(閻浮提人の貴ぶところの水花は優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花・須乾頭花にして、柔軟香潔なり。)

この文には水花の一つとして、「須乾頭花」が挙げられているのであるが、これは後で取り上げる ②) 支婁迦讖訳『道行般若經』においては「須捷提華」⁽¹⁷⁾とも表され、“saugandhika”の音写語で、“sugandha”(「芳香のある」、「芳香」)からの派生語であり、「芳香のある」、「白い(ときに青い)睡蓮」という意の語である。⁽¹⁸⁾ところで、仏典では通常、蓮池に咲く花として、蓮華を挙げるときは四種または五種で表し、青蓮華・黄蓮華・赤(または紅)蓮華・白蓮華の四種の蓮華の場合には「四種華」、「四色蓮華」と呼び、それらを水花として扱っていることもあるが、上の文にあるように、水花として挙げる場合は四種の蓮華に加えて、この“saugandhika”などが加わるのである。なお、梵文とチベット語訳『阿弥陀經』のように、色について「雑色のもの」が加わって五色となっているのは、『世記經』・「四天王品」において、次のように見られる。

(7) 竺仏念訳『長阿含經』・『世記經』

園城中間有池、名那隣尼。…中生蓮花。青・黄・赤・白・雑色、光照半由旬、其香芬薰、閻半由旬。⁽¹⁹⁾

(園と城の中間に池あり、那隣尼と名づく。…中に蓮花を生ず。青・黄・赤・白・雑色にして、光は半由旬を照らし、その香りは芬薰とし

て、半由旬に聞こゆ。)

この「雑色」の原語が何であったかは不明であるが、ここでは、「雑色」の色を加えて五色が挙げられていると見ておく。

(8) 闍那崛多等訳『起世経』(597-604年訳出⁽²⁰⁾)

a) 於山頂上、有池、名曰阿耨達多。…復有諸華、優鉢羅華・鉢頭摩華・拘牟陀華・奔荼*利迦華。其華雑色、青・黄・赤・白。大如車輪。⁽²¹⁾

* 麗本は茶とあるが、宋・元・明の三本による。以下同じ。

(山頂上において、池あり、名づけて阿耨達多という。…。また、もろもろの華あり、優鉢羅華・鉢頭摩華・拘牟陀華・奔荼利華なり。その華は雑色にして、青・黄・赤・白なり。大きな車輪のごとし。)

この「雑色」は「いろいろの色」という意味に取りたい。

b) 鞞摩質多囉阿修羅王有一大池、名曰難陀。…復有諸花、遍生池中。所謂優鉢羅花・鉢頭摩花・兜牟陀花・奔荼利花。形如火者火色、火光、形如金者金色、金光、其形青者青色、青光、其形赤者赤色、赤光、其形白者白色、白光、其形緑*者緑*色、緑*光。円**如車輪。其花光明照一由旬、香氣所薰亦一由旬。⁽²²⁾

* 麗本には緑とあるが、緑とする。

** 麗本には団とあるが、宋・元・明の三本によって、円とする。

(鞞摩質多囉阿修羅王に一大池あり、名づけて難陀という。…。また、もろもろの花あり、あまねく池中に生ず。いわゆる優鉢羅花・鉢頭摩花・兜牟陀花・奔荼利花なり。形、火のごときものには火の色、火の光、形、金のごときものには金の色、金の光、その形、青きものには青き色、青き光、その形、赤きものには赤き色、赤き光、その形、白きものには白き色、白き光、その形、緑なるものには緑なる色、緑なる光あり。円(まわり)車輪のごとし。その花の光明は一由旬を照らし、香氣の薰ずるところはまた一由旬なり。)

『起世経』は『阿弥陀経』訳出より200年後に漢訳されているのである

が、これもまた『阿弥陀経』の「蓮池の文」とほとんど同じである。ただし、池中の蓮華は四種にもかかわらず、火のごときもの、金のごときもの、青きもの、赤きもの、白きもの、緑なるものがあり、それぞれの色と光のあることが述べられている。

(9) 達摩笈多訳『起世因本経』(605-617年訳出⁽²³⁾)

a) 其池名曰阿耨達多。…。有諸雑花、優鉢羅・鉢頭摩・拘牟陀・奔荼利迦等。青・黄・赤・白及縹色等。其華円広、大如車輪。香氣氛氳、微妙最極。⁽²⁴⁾

(その池を名づけて阿耨達多という。…。もろもろの雑花あり、優鉢羅・鉢頭摩・拘牟陀・奔荼利迦等なり。青・黄・赤・白及び縹色等なり。その華、円広にして、大きさ車輪のごとし。香氣氛氳、微妙最極なり。)

b) 鞞摩質多囉阿修羅王有一大池、名曰難陀。…。復有種種諸華出生。所謂優鉢羅・鉢陀摩・究牟陀・奔荼利迦。其如火者火色、火形、火光、金者金色、金形、金光、青者青色、青形、青光、赤者赤色、赤形、赤光、白者白色、白形、白光、緑者緑色、緑形、緑光。円如車輪。其光明照一踰闍那、其香亦薰一踰闍那。⁽²⁵⁾

(鞞摩質多囉阿修羅王に一大池あり、名づけて難陀という。…。また、種種の諸華ありて、出生す。いわゆる優鉢羅・鉢陀摩・究牟陀・奔荼利迦なり。その火のごときものには火の色、火の形、火の光、金なるものには金の色、金の形、金の光、青きものには青き色、青き形、青き光、赤きものには赤き色、赤き形、赤き光、白きものには白き色、白き形、白き光、緑なるものには緑なる色、緑なる形、緑なる光あり。円(まわり)車輪のごとし。その光明は一踰闍那を照らし、その香りはまた一踰闍那に薰ず。)

この箇所における『起世因本経』の文は、『起世経』の文と訳語は少し違うところがあるが、内容は同じである。

以上のように、〈世記経〉類の四つの漢訳本における「蓮池の文」の箇

所を、それぞれの経典より二箇所ずつ取り出してみたのであるが、『阿弥陀経』の「蓮池の文」とほとんど同じであるように思われる。『阿弥陀経』の「微妙香潔」に対しても、「柔軟甚香好」（『大樓炭経』）、「柔軟香潔」（『世記経』）とあり、少し表現は違うが、「香氣所薫亦一由旬」（『起世経』）、「香氣氤氳、微妙最極」（『起世因本経』）、「其香亦薫一踰闍那」（『起世因本経』）とある。したがって、梵文とチベット語訳『阿弥陀経』、そして『阿弥陀経』の異訳である『称讚浄土経』の「蓮池の文」に「微妙香潔」の箇所がなくとも、〈世記経〉類の「蓮池の文」には「香り」に閑説する部分があるのである。とすれば、定型表現という点において、『阿弥陀経』の「微妙香潔」の箇所も、鳩摩羅什によって創られ、加えられたものではないとする見方に有力な手がかりを提供するものである。

ところで、〈世記経〉類には、パーリ文、梵文、そしてチベット語訳が現存していないので、「香り」に閑説する部分がどのようになっているのか確かめることができないのであるが、諸学者によって⁽²⁶⁾「極楽の光景に類似する描写」の一つとして挙げられている「転輪聖王の王城に関する描写」、その中でもしばしば取り上げられている「大善見 (Mahā sudassana) 王の王城クサーヴァティ (Kusāvati) の描写」においては「蓮池の文」があり、パーリ文、梵文、チベット語訳文、漢訳文と揃っているので、次にそれらの文を見てみよう。

3

〈大善見王経〉類

(10) 『長部』 (*Dīgha-Nikāya*) ・ 『大善見王経』 (*Mahā sudassana-suttanta*)

Ropāpesi kho Ānanda rājā Mahā-sudassano tāsu pokkharāṇiṣu evarūpaṃ mālaṃ uppalaṃ padumaṃ kumudaṃ puṇḍarikaṃ sabbotukaṃ sabbajanassa anāvaṭaṃ*.⁽²⁷⁾

* anācāraṃ を anāvaṭaṃ に修正。⁽²⁸⁾

(アーナンダよ、大善見王は、これらの蓮池の中に、次のような花 (mālaṃ)、四季に咲き、すべての人に開放された青蓮華 (uppalaṃ)・赤蓮華 (padumaṃ)・黄蓮華 (kumudaṃ)・白蓮華 (puṇḍarikaṃ) を植えさせた。)

この箇所は、四色の蓮華が挙げられているが、次に掲げる梵文『大善見王経』によれば、水生の花々が植えられている蓮池の描写ということになる。「微妙香潔」にあたる箇所はない。

(11) 梵文『大善見王経』(Manāsudarśanasūtra)

tāsu khalu puṣkariṇiṣu vividhāni jalajāni mālyāni ropitāny
abhūvan tadyathotpalaṃ padmaṃ kumudaṃ puṇḍarikaṃ
saugandhikaṃ madhugandhikaṃ sarvartukaṃ sarvakālikam
anāvṛtaṃ sarvajanasya |⁽²⁹⁾

(これらの蓮池の中に、種々の、水生の花々が植えられていた。すなわち、四季に咲き、いつも咲き、すべての人に開放された青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華・白睡蓮 (saugandhikaṃ) ・甘香華 (madhugandhikaṃ) である。)

この箇所について、中村元博士は「それらの蓮池には、華鬘につくられる種々の蓮が植えられていた。すなわち、青蓮、紅蓮、黄蓮、白蓮で、芳香あり、甘き香りあり、四季を通して咲き、いつも咲き、万人に向かって花を開いていた」と訳しているが⁽³⁰⁾、“vividhāni jalajāni mālyāni” の箇所は、この文の次に出てくる、

tāsām khalu puṣkariṇinām tīreṣu vividhāni sthalajāni mālyāni
ropitāny abhūvan tadyathātimuktakaś campakaḥ pāṭalā vārṣikā
mālikā navamālikā sumanā yūthikā dhānuṣkāri sarvartukaṃ
sarvakālikam anāvṛtaṃ sarvajanasya |⁽³¹⁾

(これらの蓮池の岸辺に、種々の、陸生の花々が植えられていた。すなわち、四季に咲き、いつも咲き、すべての人に開放されたチャムパ

カ（臆波伽）花・パータラー花・ヴァールシカー花（夏生）・マリーカー花・ナヴェアマリーカー花・スマラー花（肉冠花）・ユーティカー花（玉提伽）・ダーヌサーリー花（陀奴劫利）である。

とある文の “vividhāni sthalajāni mālyāni”（「種々の、陸生の花々が」）に対しているのであるから、「種々の、水生の花々が」と訳さなければならないであろう。榊本『翻訳名義大集』（*Mahāvvyutpatti*）の「6141 Puṣpa-nāmāni（諸種花名）」の章には、「6142 (1) Jala-jam〔蔵〕Chulas-skyes-pa〔漢〕水生、蓮花〔和〕水に生ずるもの、蓮」とあり、以下において水生の花、(2) Śata-pattram, (3) Padmam, (4) Utpalam, (5) Kumudam, (6) Puṇḍarikam, (7) Sāugandhikam (8) Mṛdu-gandhikam の七種が挙げられ、続いて「6150 (9) Sthala-jam〔蔵〕Skam-las-skyes-pa〔漢〕陸生〔和〕陸に於いて生ずる蓮」として (10) Campakaḥ 以下、陸生の花々が挙げられている。⁽³²⁾ これは上に掲げた梵文に挙げられている水生と陸生の花々の名前と配列の順序とに、ほぼ対応している。また、既に見ておいたように、『世記経』では閻浮提人の貴ぶ水花の一つとして「須乾頭花」が挙げられているが、これは (7) Sāugandhikam であって、訳として「〔蔵〕Dri-mchog〔漢〕勝香〔和〕白色の睡蓮」とあるものである。中村博士は上の訳文において「芳香あり」と訳しているが、ここでは「種々の、水生の花々」（水花）の一つとして挙げられているのであるから、「白色の睡蓮」でなければならないであろう。梵文『無量寿経』（*The Larger Sukhāvati-vyūha*）に “tās ca mahānadyo …; divyotpalapadmakumudapuṇḍarikasaugandhikādipuṣpasamechannā,”⁽³³⁾（「また、これらもろもろの大河は…、天の青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華・白睡蓮（saugandhika）などの花に覆われ」）とあり、また、『ラリタヴィスタラ』（*Lalitavistara*）に “… utpalapadmakumudapuṇḍarikasaugandhikamahāpuṣpavitānavitatapradeś”⁽³⁴⁾（「…青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華・白睡蓮（saugandhika）〔等〕の花の大帳蓋が処々に掛けられ、…」）とあるのも、水花を列挙しているのである。さらに、中村

博士が「甘き香りあり」と訳している“madhugandhika”は、次に掲げるチベット語訳『大善見王経』を見ると“dri-ñad 'ajam”とある。これは『翻訳名義大集』における“6149 (8) Mṛidu-gandhikam”のチベット語訳が“Dri-ñad-hjam-pa”とあるのと同じし、その訳は「〔漢〕妙香味〔和〕微妙なる香あるもの」とある。⁽³⁵⁾ “madhugandhika”については仮に「甘香華」と訳すことにするが、これも水花であろう。この箇所チベット語訳は次のようである。

(12) チベット語訳『大善見王経』

kun-dga-bo rdsiñ bzañ-po de-dag-gi nañ-na me-tog chu-las skyes-pa rnam-pa sna-tshogs 'adi-lta ste | ut-pa-la dañ | pad-ma dañ | kumu-da dañ | pad-ma dkar-po dañ | dri-mchog dañ | dri-ñad 'ajam dañ | dus-tshigs thams-cad-pa dañ | dus thams-cad-pai me-tog-gi phreñ-bai rgyu skye-bo thams-cad-la dgag-pa med-pa bskyed-do |⁽³⁶⁾

(アーナンダよ、これらの蓮池の中に、種々の、水生の花々、すなわち、いつでも華鬘の材料となり、すべての〔人〕に閉ざされていない青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華・白睡蓮、妙香華・常生華が生じていた。)

チベット語訳では、梵文の“sarvartukam”にあたる語も、水花と見ているようである。ここでは後に取り上げる義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』にある「常生華」という訳語を借りてみた。

(13) 失訳『般泥洹経』

池中常有雜種蓮華、青蓮漚鉢・紫蓮拘怛・黄蓮文那・紅蓮芙蓉、四願成行⁽³⁷⁾。

(池の中に常に雑種の蓮華あり。青蓮の漚鉢・紫蓮の拘怛・黄蓮の文那・紅蓮の芙蓉なり。四願行と成る。)

ここでは四種の蓮華のみが挙げられている。

中村博士は、この箇所を「池中に常に雑(まじ)へ種(う)ゑたる蓮華

有り。青蓮の漚鉢、紫蓮の拘恬、黄蓮の文那、紅蓮の芙蓉なり。四顧、行を成す」と訓読しているが、⁽³⁸⁾「雑種」は梵文『大善見王経』における“vividha”、すなわち「いろいろな種類の」の訳ではなかろうか。「四顧成行」という箇所がよく分からないのであるが、以下において取り上げる漢訳経典の、相当すると思われる箇所と見比べてみると、「(その蓮池の)あたり四方は(誰でも自由に行ける)行、すなわち道となっている」というような意味ではなかろうか。

(14) 白法祖訳『仏般泥洹経』(290-306年訳出⁽³⁹⁾)

池中自然生四色蓮華。青・紅・紫・白華。冬夏常生池中。⁽⁴⁰⁾

(池の中に自然に四色の蓮華生ず。青・紅・紫・白華なり。冬夏常に池中に生ず。)

この文においては、四色の蓮華が挙げられている。

(15) 僧伽提婆訳『中阿含経』・『大善見王経』(398年訳出⁽⁴¹⁾)

阿難、於彼池中、殖*種種水華。青蓮華・紅蓮・赤蓮・白蓮華。常水、常華。無守視者、通一切人。⁽⁴²⁾

* 殖は宋・元・明の三本では植とある。

(阿難よ、かの池の中において、種々の水華を殖える。青蓮華・紅蓮・赤蓮・白蓮華なり。常に水あり、常に花あり。守視する者なく、一切の人を通す。)

「種種水華」は、この経典においても、次に出てくる「種種陸華」と対しているもので、上で見た梵文『大善見王経』における“vividhāni jalajāni mālyāni”（「種々の、水生の花々が」）の箇所の訳と見られる。とすれば、「水華」とあるように、ここでも、“mālya”は「華鬘」のことでなく、「華」の意となる。そして、四種の蓮華が挙げられているが、水生の花々としてである。なお、この箇所においては、すべての人々に開放された蓮池として「守視する者なく、一切の人を通す」とあるが、「守視する者ありて、一切の人を通さず」という蓮池もあることを、この『中阿含経』所収の『大善見王経』は他の箇所で説いている。そして、この「守視

する者ありて、一切の人を通さず」という文は、⁽⁴³⁾ 幼年期において恵まれた生活であったことを回想しつつ、釈尊が説かれる教えの一部分にも見られる。

(16) 僧伽提婆訳『中阿含経』・『柔軟経』

於彼池中、殖*種種水華。青蓮華・紅蓮華・赤蓮華・白蓮華。常水、常華。使人守護、不通一切。為我好遊戲故。⁽⁴⁴⁾

* 殖は宋・元・明の三本では植とある。

(彼の池の中において、種々の水華を殖える。青蓮華・紅蓮華・赤蓮華・白蓮華なり。常に水あり、常に華あり。人をして守護せしめ、一切を通さず。われ遊戲を好むがための故なり。)

釈尊の父・浄飯王は、遊戲を好む息子の王子のためだけに、蓮池を造り、水華を殖えたというのである。なお、この箇所と対応しているパーリ文では、

(17) 『増支部經典』(Āṅguttara-Nikāya)・「天使品」(Devadūta-Vagga)・38

Mama sudam bhikkhave pitu nivesane pokkharāṇiyo kāritā honti, ekattha sudam uppalaṃ pupphati ekattha padumaṃ ekattha puṇḍarikaṃ yāvad eva mama atthāya.⁽⁴⁵⁾

(比丘たちよ、私の父の住処においてはもろもろの蓮池が造られていた。あるところには青蓮華 (uppala) が、あるところには赤蓮華 (paduma) が、あるところには白蓮華 (puṇḍarika) が花を咲かせていたが、それはただ私のためであった。)

とある。

(18) 竺仏念訳『長阿含経』・『遊行経』(413年訳出⁽⁴⁶⁾)

其池水中*生衆雜華。優鉢羅華・鉢**頭摩華・拘勿***頭華・分陀利華。出微妙香、飜馥四散。⁽⁴⁷⁾

* 麗本では中水とあるが、宋・元・明の三本によって、水中とする。

** 麗本では波とあるが、三本によって、鉢とする。

*** 麗本では俱物とあるが、三本によって、拘勿とする。

『阿弥陀経』における「微妙香潔」について

(その池水の中にもろもろの雑華生ず。優鉢羅華・鉢頭摩華・拘勿頭華・分陀利華なり。微妙の香りを出だし、飜馥として四散す。)

この經典においても、「其池水中生衆雑華」すなわち水生華に対し、次の箇所には「其池四面陸地生華」、すなわち陸生華が挙げられている。また、「出微妙香、飜馥四散」の箇所についても、梵文の“saugandhikaṃ madhugandhikaṃ”の訳ではないかと思われるが、確定はできない。

(19) 義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』(701年訳出⁽⁴⁸⁾)

池中多有可愛之華。嚙鉢羅・鉢頭摩・俱物頭・分陀利迦・極軟華・極香華・常生華。如是諸華、人無護者、隨其受用。⁽⁴⁹⁾

(池の中に多くの、愛すべき華あり。嚙鉢羅・鉢頭摩・俱物頭・分陀利迦・極軟華・極香華・常生華なり。かくのごときのもろもろの華、人の護る者なく、その受用に隨う。)

「分陀利迦」に続いて「極軟華・極香華・常生華」とある。これは梵文の“saugandhikaṃ madhugandhikaṃ sarvartukaṃ”にあたる箇所であり、水花の名前を列挙しているのであろう。とすれば、上で述べたように、チベット語訳では“dus-tshigs thams-cad-pa”を水花としているようであるが、義浄も“sarvartukaṃ”を水花として「常生華」と訳したことになる。なお、〈大善見王経〉類の經典ではないが、次のような箇所を持つ經典がある。

(20) 功德直訳『菩薩念仏三昧経』(462年訳出⁽⁵⁰⁾)

無量力王植衆奇花。優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分頭利花・那梨尼花、香氣調柔、無悋惜者、隨意採之。⁽⁵¹⁾

(無量力王はもろもろの奇花を植える。優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分頭利花・那梨尼花にして、香氣調柔なり。悋惜する者なく、随意にこれを採る。)

以上のように、〈大善見王経〉類における「蓮池の文」を見てきた。梵文には“saugandhikaṃ madhugandhikaṃ”とあり、『遊行経』には「出微妙香、飜馥四散」という箇所もあることが判明したが、これらによっ

ては、鳩摩羅什が依用した原本の〈阿弥陀経〉における「微妙香潔」の原語が、どんなものであるかを推定することはできなかった。なお、〈大善見王経〉類については、その物語の内容を分析して、原型から部派による伝承へと、どのように分かれていったのかという系統図が提示されているが、「蓮池の文」の内容に関する限り部派による伝承に相違を生じなかったのか、分かれていない。ところで、「極楽の光景に類似する描写」の一部として、「蓮池の文」を持つ大乘経典の中で、「香り」に閑説する箇所を持つ、初期大乘経典の代表的な例として梵文『八千頌般若経』を挙げることができる。そして、これに対応する、漢訳の小品系〈般若経〉類の箇所もある。次にそれらを見てみよう。

4

小品系〈般若経〉類

(2) 梵文『八千頌般若経』(*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*)

sarvāsu tāsū puṣkariṇiṣu sapta-ratna-mayāni vicitrāni
darśaniyāni utpala-padma-kumuda-puṇḍarikāṇi jātāni yais tad
udakam saṃchāditaṃ | sarvāṇi ca tāny utpala-padma-kumuda-
puṇḍarikāṇi śakaṭa-cakra-pramāṇa-pariṇāhāni sugandhāni
nilāni nila-varṇāni nila-nidarśanāni nila-nirbhāsāni pītāni pīta-
varṇāni pīta-nidarśanāni pīta-nirbhāsāni lohītāni lohita-varṇāni
lohita-nidarśanāni lohita-nirbhāsāni avadātāni avadāta-varṇāny
avadāta-nidarśanāny avadāta-nirbhāsāni |⁽⁵³⁾

(これらすべての蓮池の中には、七宝でできている、きらびやかで美しい、もろもろの青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華が生じていて、これら〔の蓮華〕によって、その水面が覆われている。そして、これらすべての青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華はまわりが車輪ほどの大きさがあり、芳香があり (sugandhāni)、青いものは青い色、青い外観、

青い光をもっており、黄いろいものは黄いろい色、黄いろい外観、黄いろい光をもっており、赤いものは赤い色、赤い外観、赤い光をもっており、白いものは白い色、白い外観、白い光をもっている。）

この箇所は、多少、語句の位置が前後に入れ替わっているところもあるが、梵文『阿弥陀経』の「蓮池の文」とほとんど同じと言ってよいほどである。藤田博士も、「とくに、表現の上から見ると、蓮池における蓮華の描写の一節が、「阿弥陀経」の描写とそっくり同じであり、…」と述べている。⁽⁵⁴⁾そして、小品系〈般若経〉類には見出せない、「芳香があり」と「香り」に閑説している。おそらく、『阿弥陀経』の原本において、「微妙香潔」にあたる箇所は、この『八千頌般若経』の「芳香があり」と同じ語であったように思われる。とすれば、その梵語は“sugandha”（「芳香」）ということになる。

ところで、以上のように、『八千頌般若経』と梵文『阿弥陀経』の「蓮池の文」とはほとんど同じであるが、子細に見てみると違うところもある。梵文とチベット語訳『阿弥陀経』には、文の初めのところに「これらの蓮池の中には、もろもろの蓮華（padmāni）が生じていて」とあるのに対して、『八千頌般若経』には、「これらすべての蓮池には、…、もろもろの青蓮華（utpala）・赤蓮華（padma）・黄蓮華（kumuda）・白蓮華（puṇḍarikāni）が生じていて」とあること、そして梵文とチベット語訳『阿弥陀経』にある「雑色のものは雑色の色、雑色の光、雑色の外観をもっており」という箇所が『八千頌般若経』にはないことを注意しておきたい。次に漢訳の小品系〈般若経〉類を見ておこう。

(2) 支婁迦讖訳『道行般若経』（179年訳出⁽⁵⁵⁾）

遼城有七重池水。水中有雑種優鉢蓮花・拘文羅華・不那利華・須捷提華・末願捷提華。皆在池水中生。⁽⁵⁶⁾

（城を繞って七重の池水あり。水中に雑種の優鉢蓮花・拘文羅華・不那利華・須捷提華・末願捷提華あり。みな池水の中にあって生ず。）

「須捷提華・末願捷提華」の箇所は、既に取り上げた梵文『大善見王経』

の「蓮池の文」に見られる“saugandhikaṃ madhugandhikaṃ”の音写語のように思われる。したがって、これは水花を挙げている文である。

(23) 支謙訳『大明度経』(222-253年訳出⁽⁶⁷⁾)

繞城有七重池。水中有雜種青蓮及諸名花。其香薰国、光色遐耀。…。
皆在池中生。⁽⁵⁸⁾

(城を繞って七重の池あり。水中に雜種の青蓮およびもろもろの名花あり。その香り国に薰り、光色遐耀す。…。みな池の中にあって生ず。『大明度経』では、「其香薰国」とあり、「香り」に關説している。

(24) 鳩摩羅什訳『小品般若波羅蜜経』(408年訳出⁽⁶⁹⁾)

諸池水中皆有青・黄・赤・白蓮花。大如車輪。弥覆水上。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光。⁽⁶⁰⁾

(もろもろの池水の中にみな青・黄・赤・白蓮華あり。大きき車輪のごとし。水上を弥覆す。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり。)

『阿陀陀経』と同じく、この經典は鳩摩羅什の訳出になるものであるが、「微妙香潔」にあたる箇所はない。そして、四色の蓮華のみを挙げている。

(25) 施護訳『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』(1004年訳出⁽⁶¹⁾)

是諸池中亦有種種妙色香華。所謂優鉢羅華・俱母陀華・奔拏利迦華等。是一一華、大如車輪。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光。⁽⁶²⁾

(このもろもろの池の中にまた種々の妙色の香華あり。いわゆる優鉢羅華・俱母陀華・奔拏利迦華等なり。この一々の華、大きき車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり。)

この經典には「妙色香華」という箇所がある。

以上、小品系〈般若経〉類の漢訳の四本を見てきたのであるが、「須捷提華・末願捷提華」(『道行般若経』)とあるもの、「其香薰国」(『大明度経』)、とあるもの、そして「香り」については何も關説しないもの(『小品般若波羅蜜経』、「妙色香華」(『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』)とい

うことになった。この結果から言えることは、〈阿弥陀経〉類においても、『阿弥陀経』のように「微妙香潔」の箇所のあるもの、梵文、チベット語訳、そして『称讃浄土経』のように「微妙香潔」の箇所のないものという違いがあるのは、伝承系統の違いということであろうか。『阿弥陀経』における「微妙香潔」の箇所は、鳩摩羅什によって創られ、加えられたものではないことは確かである。

5

以上のように、『阿弥陀経』の原本における「微妙香潔」にあたる箇所は、『八千頌般若経』の「蓮池の文」の中にある“sugandha”（「芳香」）という語ではないかと推定したのであるが、鳩摩羅什を除いて「微妙香潔」という訳語は、いったい誰によって用いられたものかということも見ておきたい。既に拙論において述べておいたことであるが、⁽⁶³⁾『阿弥陀経』には「衣祴」という見慣れない語が用いられている。この語は支婁迦讖が『佉真陀羅所問経』において最初に使ったようであるが、鳩摩羅什が『阿弥陀経』において「各以衣祴、盛衆妙華」、『法華経』において「各以衣祴、盛諸天華」と漢訳したのは、明らかに竺法護が『密迹金剛力士会』（『大宝積経』所収）において「各以衣祴、盛好天華」と訳したのを意識してのことであるように思われる。鳩摩羅什の訳経には、竺法護の訳語に倣っているものがあるようであるから、「微妙香潔」についても、竺法護の訳出経典を見てみると、『大哀経』（291年訳出⁽⁶⁴⁾）において、次のような箇所がある。

又自然生衆宝蓮華。大如車輪。其色若干、見者心歡。其形微妙、香潔甚美。⁽⁶⁵⁾

（また自然にもろもろの宝蓮華を生ず。大きき車輪のごとし。その色の若干、見る者の心歡ぶ。その形は微妙、香潔にしてはなほだ美なり。）
鳩摩羅什が、この箇所に倣って『阿弥陀経』において「微妙香潔」と訳

したかどうかは不明であるが、このような訳例が竺法護にあることを紹介しておくことにする。なお、竺法護が訳した『海龍王經』(285年訳出⁽⁶⁶⁾)には、次のような箇所もある。

其塹七重、満八味水、生青蓮・紅蓮・黄蓮・白蓮、皆有美香。⁽⁶⁷⁾

(その塹は七重にして、八味の水を満たし、青蓮・紅蓮・黄蓮・白蓮を生じ、みな美香あり。)

また、鳩摩羅什以後の訳出經典では、たとえば実叉難陀訳『大乘四法經』(710年までに訳出⁽⁶⁸⁾)に、

文殊師利、説此法時、善勝天子、及其眷属、歡喜踊躍、以天曼陀羅花・波頭摩花・拘物頭花・分陀利花、供養文殊師利、及散一切衆会。以仏神力、所散之花、上昇虚空、成大蓮花、量如車輪。微妙香潔、悦可衆心。⁽⁶⁹⁾

(文殊師利、この法を説く時、善勝天子、及びその眷属、歡喜踊躍し、天の曼陀羅花・波頭摩花・拘物頭花・分陀利花をもって文殊師利に供養し、及び一切衆会に散ず。仏の神力をもって、散ぜられた花、虚空に上昇し、大蓮花となり、量は車輪のごとし。微妙香潔にして、衆の心を悦可せしむ。)

とある。

この「量如車輪、微妙香潔」の箇所は、梵文『八千頌般若經』の“śakaṭa-cakra-pramāṇa-pariṇāhāni sugandhāni”（「まわりが車輪ほどの大きさがあり、芳香があり」）と一見したところでは一致している。

さて、『阿弥陀經』における「微妙香潔」は“sugandha”という一語を訳したものではないかと、今のところ考えているのであるが、中国ではどのうよに解釈されてきたのであろうか。それを最後に見ておきたい。宋の智円述『仏説阿弥陀經疏』では、

後総示香氣。微妙香潔故。⁽⁷⁰⁾

(後は総じて香氣を示す。「微妙香潔」の故に。)

とあって、「微妙香潔」の箇所全体が香氣を述べているものと見ている。

『阿弥陀経』における「微妙香潔」について

これに対して、明の智旭解『仏説阿弥陀経要解』では、

微妙香潔、是略歎蓮華四徳。⁽⁷¹⁾

(「微妙香潔」、これ蓮華の四徳を略歎す。)

とあって、「(池中の蓮華は) 微、妙、香、潔である」というのである。「香」は「よい香りがある」という意味であろう。また、宋の元照述『仏説阿弥陀経義疏』によれば、

四示蓮華有五。一形量、二顕色、三光焰、四香氣、五潔淨。⁽⁷²⁾

(四に蓮華に五あるを示す。一に形量、二に顕色、三に光焰、四に香氣、五に潔淨なり。)

とある。これは「池中蓮華」について、「大如車輪」を形量、「青色青光、…、白色白光」を顕色と光焰、「微妙香」を香氣、「潔」を潔淨と五徳で解釈したものである。したがって、『阿弥陀経』における「微妙香潔」は「(池中の蓮華は) 微妙の香りあって、潔 (いさぎよ) し」とでもなるのであろうか。ところで、基法師撰と伝える『阿弥陀経』では、次のようにあることを付記しておこう。

経曰微妙香潔。次、釈第四香氣也。⁽⁷³⁾

(経に曰く、「微妙香潔」と。次に、第四に香氣を釈するなり。)

宋の智円と同じく、「微妙香潔」の箇所全体が、「香氣」について述べていると見ている。

おわりに

以上において、明らかになった点について要約しておきたい。

1) (1)『阿弥陀経』の「蓮池の文」における「微妙香潔」の箇所は (2) 梵文と (3) チベット語訳『阿弥陀経』、そして (4)『称讃浄土経』にはないが、(2)梵文『八千頌般若経』の「蓮池の文」の中には「芳香があり (sugandh-āni)」という箇所がある。梵文『阿弥陀経』と『八千頌般若経』の「蓮池の文」はほとんど同じ文であるので、恐らく、鳩摩羅什によって用いら

れた『阿弥陀経』の原本には『八千頌般若経』と同じような「芳香があり」という箇所があり、鳩摩羅什はそれを「微妙香潔」と訳したものであろうと推定する。したがって、「微妙香潔」の箇所は鳩摩羅什によって創られ、加えられたものではない。

2) 鳩摩羅什によって用いられた『阿弥陀経』の原本が現存の梵文『阿弥陀経』と同じように梵語であったとすれば、「微妙香潔」の箇所は『八千頌般若経』のように“sugandha”という語であったと思われる。

3) 『八千頌般若経』と梵文『阿弥陀経』の「蓮池の文」は、子細に見ると違うところがある。梵文『阿弥陀経』には、文の初めのところに「これらの蓮池の中には、もろもろの蓮華が生じていて」とあるのに対して、『八千頌般若経』には、「これらすべての蓮池には、…、もろもろの青蓮華・赤蓮華・黄蓮華・白蓮華が生じていて」とあること、そして梵文『阿弥陀経』にある「雑色ものは雑色の色、雑色の光、雑色の外観をもっており」という箇所が『八千頌般若経』にはないことであるが、既に取り上げた(7)竺仏念訳『長阿含経』・『世記経』の「蓮池の文」には、

園城中間有池、名那隣尼。…。中生蓮花。青・黄・赤・白・雑色、光照半由旬、其香芬薰、聞半由旬。⁽⁷⁴⁾

(園と城の中間に池あり、那隣尼と名づく。…。中に蓮花を生ず。青・黄・赤・白・雑色にして、光は半由旬を照らし、その香りは芬薰として、半由旬に聞こゆ。)

とあって、「…有池、…中生蓮花」とあるところ、そして「青・黄・赤・白・雑色」と雑色が挙げられているところの表現が、梵文『阿弥陀経』とよく似ている。とすれば、梵文『阿弥陀経』の「蓮池の文」は『八千頌般若経』の「蓮池の文」の系統を受けているのではなく、〈世記経〉類、その中でも『長阿含経』・『世記経』のような系統のものを受けているということになる。

註

- (1) 『阿弥陀経』の訳出者と訳出年については、僧祐撰『出三蔵記集』(以下『出三』という)巻二の「鳩摩羅什」の項に「無量寿経一卷或云阿弥陀経」(『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』という)55巻、11頁、上段)とあり、費長房撰『歴代三蔵紀』(以下『三蔵紀』という)巻八の「鳩摩羅什」の項に「弘始四年(402)」(『大正蔵』49巻、78頁、上段)とある。このことについて、藤田宏達『原始浄土思想の研究』(岩波書店、1970年、第1刷)108頁参照。
- (2) 『大正蔵』12巻、347頁、上段。
- (3) *Sukhāvātī-vyūha, Description of Sukhāvātī, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjio (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II, Oxford, 1883) 所収の *The Smaller Sukhāvātī-vyūha*, p. 94, ll. 1-7. なお、補正箇所については、「〔附〕補正一覧」(藤田宏達『阿弥陀経講究』所収、真宗大谷派宗務所出版部、2001年、裏87-88頁)参照。
- (4) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』474-505頁。
- (5) 河口慧海「蔵和对訳 阿弥陀経」の蔵訳(底本はナルタン版)(浄土宗全書23、『梵蔵和英合璧 浄土三部経』所収、山喜房仏書林、1972年、再版、344頁、9-13行)。
- (6) 『称讃浄土仏摂受経』の訳出者と訳出年については、智昇撰『開元釈教録』(以下『開元録』という)巻八の「玄奘」の項に「称讃浄土仏摂受経一卷」として「永徽元年(650)…訳」(『大正蔵』55巻、555頁、下段)とある。
- (7) 『大正蔵』12巻、349頁、上段。
- (8) 藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』(法蔵館、1979年、第2刷)236頁、下段-237頁、上段。
- (9) 藤田宏達「玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』考」(『印度哲学仏教学』第13号、1998年)21頁。
- (10) 『大樓炭経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「法炬・法立」の項において、四部の中に「楼炭経六巻」とあり、「右四部、凡十二巻。晋惠懐(十帝)宋、元、明の三本)時(291-312年)、沙門法炬訳出」(『大正蔵』55巻、9頁、下段)とある。
- (11) 『大正蔵』1巻、278頁、下段。
- (12) 『大正蔵』1巻、296頁、上段。
- (13) 『長阿含経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「仏馱耶舎」の項に「長阿含経二十二巻」とあり、割註に「晋弘始十五年(413)出。竺仏念伝訳」(『大正蔵』55巻、11頁、中段)とある。また、釈僧肇「長阿含経序」(『大正

- 蔵』55巻、63頁、下段)も同じ。
- (14) 『大正蔵』1巻、117頁、上段、…、中段。
 - (15) 『大正蔵』1巻、132頁、下段。
 - (16) 『大正蔵』1巻、132頁、中—下段。
 - (17) 『大正蔵』8巻、471頁、下段。
 - (18) 荻原雲来編纂・辻直四郎協力『漢訳対照 梵和大辞典』(鈴木学術財団、1979年、増補改訂版)1506頁、左。
 - (19) 『大正蔵』1巻、130頁、中段。
 - (20) 『起世経』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻七の「闍那幅多」の項に「起世経十巻」とあり、割註に「第五訳。…幅多・笈多二法師共出(宋、元、明の三本によれば出は訳とある)」(『大正蔵』55巻、549頁、上段)」とある。「597(年)」については「或は開皇十七年(597)以後に」とある小野玄妙『仏書解説大辞典』別巻・仏典総論(大東出版社、改訂発行、1978、137頁、上段)による。「604年」については、道宣撰『大唐内典録』(以下『内典録』という)巻五の「達摩幅多」の項に「仁寿之末(604)〔闍那〕幅多…流擯東越」(『大正蔵』55巻、280頁、上段)による。
 - (21) 『大正蔵』1巻、312頁、下段。
 - (22) 『大正蔵』1巻、337頁、上段。
 - (23) 『起世因本経』の訳出者と訳出年については、『内典録』では「達摩幅多」の項に「東都起世経十巻」(『大正蔵』55巻、280頁、上段)とあり、『開元録』では「起世因本経十巻」(『大正蔵』55巻、551頁、下段)とあり、この経典は「従大業初年(605)、終大業末歳(617)。訳大方等善住意等经九部、…」(『大正蔵』55巻、552頁、中段)の中に入っている。
 - (24) 『大正蔵』1巻、369頁、下段。
 - (25) 『大正蔵』1巻、392頁、上段。
 - (26) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』487頁参照。
 - (27) *Dīgha-Nikāya.*, Vol. II, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, PTS., Repr., 1966, p. 179, ll. 16–19.
 - (28) 藤田宏達、前掲書、註(3)による。
 - (29) Das *Mahāparinirvāṇasūtra*, Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins, auf Grund von Turfan-Handschriften herausgegeben und bearbeitet von Ernst Waldschmidt, Teil III, Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1950 Nr. 3.,

Akademie-Verlag Berlin, 1951, S. 310, 34. 12. (復刻、臨川書店 1986 年、以下 *MPS.* という。)

- (30) 中村元『遊行経』下〈阿含二〉(『仏典講座』1、大蔵出版、1985 年) 550 頁。
- (31) *MPS.*, Teil III, S. 310, 34. 13. なお、この和訳において、花の名の後のカッコの中は、榊亮三郎『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集』(鈴木学術財団、1962 年、第 2 刷) 397 頁による。
- (32) 榊亮三郎、前掲書、396-397 頁。なお、E. Waldschmidt は、註(29)と(31)の 34・12 及び 13 の箇所に対応している *Divyāvādāna*, S. 221. 10 の箇所を脚註において示し、更に『翻訳名義大集』の「水生」と「陸生」の花々を挙げている。
- (33) *Sukhāvāṭṭyūha*, édité par Atsuuji Ashikaga, Kyoto, Librairie Hōzōkan, 1965, p.35, l. 15, …; ll. 17-18.
- (34) *Lalitavistara*, ed. by Kouichi Hokazono, p. 288, ll. 6-7. (外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究』上巻(大東出版社、1994 年)所収)。
- (35) 榊亮三郎、前掲書、397 頁。
- (36) *MPS.* Teil III, S. 311, 34・12.
- (37) 『大正蔵』1 卷、185 頁、中段。
- (38) 中村元、前掲書、551 頁。なお、この『般泥洹経』が「失訳」であることについては、中村元『遊行経』上〈阿含一〉(『仏典講座』1、大蔵出版、1984 年) 18-19 頁参照。
- (39) 『仏般泥洹経』の訳出者と訳出年については、『三宝紀』巻六の「白法祖」の項に「泥洹経二卷」とあり、「恵帝世(290-306 年)…出」(『大正蔵』49 卷、66 頁、上一中段)とある。また、『開元録』巻二の「白遠」(字は法祖)の項において、「仏般泥洹経一卷」とあり、割註に「見長房録」と記し、「於恵帝代、訳菩薩逝経等一十六部」(『大正蔵』55 卷、498 頁、下段-499 頁、上段)と述べている。
- (40) 『大正蔵』1 卷、170 頁、中段。
- (41) 『中阿含経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻九所収の「中阿含(含は麗本には鎗とあるが、宋、元、明の三本による)経序」に「然後乃以晋隆安元年、…更出中阿含。…至僧伽提和軻胡為晋。…至来二年(398)…、草本始訖」(『大正蔵』55 卷、64 頁、上段)とある。この「経序」は麗本(すなわち『大正蔵』所収の『中阿含経』末尾に少し省略もあるが、「後出中阿含経記」(『大正蔵』1 卷、809 頁、中一下段)として出ている。また、『出三』巻二の「僧伽提婆」の項に「中阿含経六十卷」とあり、その割註に「晋隆安元年…於東亭寺訳出。至二年(398)…訖」(『大正蔵』55 卷、10 頁、下段)とある。
- (42) 『大正蔵』1 卷、515 頁、下段。

- (43) 『大正藏』1巻、516頁、中一下段。
- (44) 『大正藏』1巻、607頁、下段。
- (45) *The Aṅguttara-Nikāya*, Part I, ed. by R. Morris. Second Edition revised by A. K. Warder. Vol. I, London, PTS., 1961, p. 145. ll. 6-9.
- (46) 『長阿含経』の訳出者と訳出年については、註(13)。
- (47) 『大正藏』1巻、23頁、上段。
- (48) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻九の「義浄」の項に「根本説一切有部毘奈耶雜事四十巻」とあり、割註に「景龍四年(701)…訳」(『大正藏』55巻、568頁、上段)とある。
- (49) 『大正藏』24巻、393頁、上段。
- (50) 『菩薩念仏三昧経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「功德直」の項に「念仏三昧経六巻」とあり、割註に「宋大明六年(462)訳出」(『大正藏』55巻、13頁、上段)とある。
- (51) 『大正藏』13巻、795頁、中段。
- (52) 辛島静志「涅槃経(小乗)と大善見王物語」(『四天王寺』第526号所収、1985年、69-82頁)。
- (53) *Abhisamayālaṃkāra' ālokā Prajñāpāramitāvyaḥkhyā*, the Work of Haribhadra, ed. U. Wogihara, Tokyo, The Toyo Bunko, Second printed 1973, p. 933, ll. 21-29, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, with Haribhadra's Commentary Called Āloka*, ed. by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts-No. 4, Darbhanga, 1960, p. 240, ll. 27-32.
- (54) 藤田宏達、前掲書、477頁。
- (55) 『道行般若経』の訳出者と訳出年については、未詳作者「道行経後記」(『出三』巻七所収)に「光和二年(179)…。時伝言訳者(者訳とあるのを元本と明本によって訳者とする)月支菩薩支識」(『大正藏』55巻、47頁、下段)とある。また、『出三』巻二の「支識」の項に「般若道行品経十巻」とあり、割註に「光和二年…出」(『大正藏』55巻、6頁、中段)とある。
- (56) 『大正藏』8巻、471頁、下段。
- (57) 『大明度経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「支謙」の項に「明度経四巻」とあり、「支謙以呉主孫權黄武初(222)至、孫亮建興中(253)所訳出」(『大正藏』55巻、7頁、上段)とある。
- (58) 『大正藏』8巻、504頁、中段。
- (59) 『小品般若波羅蜜経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「鳩摩羅什」の項に「弘始十年(408)」(『大正藏』55巻、10頁、下段)とある。釈僧叡作「小品経序」(『大正藏』55巻、55頁、上段)も同じ。

『阿弥陀経』における「微妙香潔」について

- 60 『大正蔵』8巻、581頁、上段。
- 61 『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』の訳出年については、『大中祥符法宝録』巻第十二（『宋蔵遺珍』六（新文豊出版公司、中華民国六十七年）、3893頁、上段）に「起咸平六（1003）春、終景德元（1004）冬」とある。
- 62 『大正蔵』8巻、669頁、中段。
- 63 拙論『『阿弥陀経』における「衣械」という語について』（『同朋仏教』第35号、1999年7月、裏1-26頁）、拙論『『阿弥陀経』における「衣械」という語についての再検討』（『同朋大学論叢』第83号、2000年12月、裏1-14頁）。
- 64 『大哀経』の訳出者と訳出年については、未詳作者「如来大哀経記」（『出三』巻九所収）に「元康元年（291）七月七日燉煌菩薩法護手執胡経、経名如来大哀口授、…。以其年八月二十三日訖」（『大正蔵』55巻、63頁、中段）とある。また、『出三』巻二の「竺法護」の項に「大哀経七巻」とあり、割註に「元康元年七月七日出」（『大正蔵』55巻、7頁、中段）とある。
- 65 『大正蔵』13巻、445頁、下段。
- 66 『海龍王経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「竺法護」の項に「海龍王経四巻」とあり、割註に「或三巻。太康六年（285）七月十日出」（『大正蔵』55巻、7頁、中段）とある。
- 67 『大正蔵』15巻、140頁、中段。
- 68 『大乘四法経』の訳出者については、『開元録』巻九の「実叉難陀」の項に「大乘四法経一卷」（『大正蔵』55巻、566頁、上段）とあり、「以景雲元年（710）十月十二日右脇累足、终于大薦福寺」（『大正蔵』55巻、566頁、中段）とある。
- 69 『大正蔵』17巻、710頁、中段。
- 70 『大正蔵』37巻、354頁、下段。
- 71 『大正蔵』37巻、368頁、上段。
- 72 『大正蔵』37巻、360頁、上段。
- 73 『大正蔵』37巻、320頁、中段。
- 74 註(19)。